



Title	米国 エモリー大学で学ぶPublic Health : 人道支援から中米での水・衛生改善プロジェクトまで
Author(s)	佐藤, 哲郎
Citation	目で見えるWHO. 2024, 90, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/99622
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

米国 エモリー大学で学ぶPublic Health —人道支援から中米での水・衛生改善プロジェクトまで—



Emory University, Rollins School of Public Health,
Hubert Department of Global Health

佐藤 哲郎 (さとう てつろう)

藤田医科大学医療検査学科卒。JICA海外協力隊ホンジュラス、東京都健康安全研究センター、国立感染症研究所、国立国際医療研究センターにて勤務。

私は現在、米国ジョージア州アトランタにあるエモリー大学公衆衛生大学院でグローバルヘルスを学んでいます。アトランタは米国南部有数の商業都市であり、コカ・コーラ社、CNN(Cable News Network、ニュース番組)やデルタ航空の本社が置かれています。公衆衛生大学院の校舎は、米国はじめ世界の疾病対策を司る米国疾病予防管理センター（以下CDC）に隣接しています。アトランタにはCDCの他にも、ジミー・カーター元大統領により設立されギニア虫撲滅キャンペーンなど疾病の撲滅に取り組む非営利・非政府組織カーターセンターがあり、Public Health Capitalとも言われています。

これまでの歩み

私は高校生の時に、校庭の土から新種の放線菌を発見する研究に没頭し、感染

症に興味を持ちはじめました。藤田医科大学の医療検査学科に進学し、学業の傍ら長期休暇を活用して東南アジアの難民キャンプ等のボランティアに参加しました。中でもエイズ孤児養育施設の訪問に衝撃を受け、その後、医療系学生による中高生への性教育ピアエデュケーションに携わりました。また、大学時代は国際保健医療学会学生部会（現jagh-s）の運営委員を務めており、第3回日本WHO協会共催フォーラム（テーマ：HIV/エイズとジェンダー）の企画に携わりました。大学卒業後は、より広い視点から感染症を捉えたいという思いがあり、JICA海外協力隊の感染症・エイズ対策隊員に志願しました。中米のホンジュラス共和国に2年間派遣され、ユースクリニックでの性教育など予防啓発に従事しました。帰国後は東京都健康安全研究センターでウイルス検査に従事した

後、国立感染症研究所の実地疫学専門家養成コースにて感染症実地疫学を on-the-job トレーニングで学びました。2020年からは厚生労働省新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）対策本部クラスター対策班の接触者追跡チームの一員としてアウトブレイク対応を経験し、その後、国立国際医療研究センター国際感染症センターにてCOVID-19入院患者に対する臨床研究や未知の感染症（Disease X）対策に従事しました。初期のCOVID-19対応で記者会見のサポートも担当した際に、感染症研究者と市民の架け橋となる専門家が不足していると痛感しました。適切なコミュニケーション方法を学びたいと考え、留学を志しました。

感染症対策を学ぶ上でこの上ない環境

本学は全米に約200校ある公衆衛生大学院の内、ハーバード大学と並び第3位にランクインし、教育体制や、豊富なインターンの機会が評価されています。授業やインターン、研究など、隣接する



写真1 JICA海外協力隊感染症エイズ対策隊員としてホンジュラスにてコンドーム配布活動



写真2 公衆衛生大学院の校舎（地上8階地下2階建てが3棟）



写真3 連日開催される学外研究者によるランチョンセミナー風景（ビザとコーラ付き）



写真4 CDCマンディ・コーエン所長（後列右から5人目）を交えての授業打ち上げ（筆者は前列左から4人目）

CDC とコラボレーションが盛んであり、感染症だけでなく慢性疾患や予防医学研究を行う上で恵まれた環境にあります。日本人卒業生は、WHO、CDC、アメリカ食品医薬品局（Food and Drug Administration）、国立感染症研究所、国立がん研究センター、博士課程への進学など多方面で活躍しています。日本人学生のバックグラウンドとしては医師が多く、他には医療職、厚生労働省からの出向者、文系学部出身者や学部新卒者など多様です。世界各国から集う同級生の知識や経験から学ぶことも多いです。

本学は以下7つの専攻で構成されており、

1. Global Health(GH)
2. Behavioral, Social, and Health Education Science
3. Epidemiology
4. Health Policy Management
5. Biostatistics & Bioinformatics
6. Environmental Health
7. Executive MPH

ここでは、私の専攻であるGHの概要をご紹介します。GHは既存の様々な学問領域から知見を拝借し、社会課題の解決に取り組むことを目的としています。従って教員の専門分野は多様で、学生の関心領域も様々です。GHの最大の特徴

は、カリキュラムの自由度が高いことです。必修授業のほか、多くの授業選択は個人に委ねられています。様々な講義や経験を積む中で関心のある分野が変わることもあります。状況に応じ、転学も含め柔軟に対応することができます。

印象的な経験

最も印象的な授業はHealth in Humanitarian Emergenciesです。この授業はCDCのEmergency Response and Recovery Branchの職員が持ち回りで講師を担当し、疾患別各論のみならずキャンプの運営方法から緊急時リスクコミュニケーションまで、実際の経験を交えてのとても臨場感のある授業でした。授業後にはキャリア相談も含めたネットワークの機会も設けられ、所長まで挨拶にいらしていました。

本学には様々なインターンシップの機会が設けられており、Applied Practice Experience (APE) と言われる実習に重きを置いています。APEの要件、開始時期は各人によって異なり、1年目と2年目の間の夏休み期間中（約4ヶ月）に行う場合が多いです。APEでは、200時間以上の実習が規定され、Certificateを履修中の学生は、条件が指定されています。私の場合、

Infectious disease epidemiology と WASH (Water, Sanitation and Hygiene) の Certificate を選択しているので、APEの内容は両Certificateに関連する必要があり、担当教員の許可が必要でした。APEは、大学関係のほか、CDCやジョージア州のPublic Health Department、病院、企業、NGO国際機関など、自らコンタクトをとって機会を得て、各人の目的に合致した経験を米国内または国外で積むことができます。私の場合、教員が国際NGOと共同で実施しているホンジュラスでのプロジェクトにResearch Assistantとして参加しています。大まかな研究内容は、衛生状況の改善が女性の健康に及ぼす影響を混合研究法で評価することです。現地の方々にも協力いただくプロジェクトであるため、倫理審査による遅延など予想外の障壁にも直面しました。今まで座学で学んできた内容を、実際の現場に落としこむ貴重な機会であると日々実感しております。

最後になりましたが、私もこちらの留學生日記を参考に、英語スコア向上や出願手続きのモチベーションを維持してきました。進学を検討されている皆様、少しでも有益な情報が届けられていたら幸いです。